

「東北、20年の思い出」



和島 実

「君、ちょっと東北に2～3年行ってくれよ」と本社部長の甘い言葉に乗せられて、昭和52年3月家族4人と共に仙台駅に降り立った。当時は上野～仙台間に「特急ひばり」で4時間を要し、仙台駅も薄暗い駅舎であった。

その頃の東北のイメージは、「遠い・暗い・寒い・貧しい」等決して良いものではなかった。仙台の冬はかなり雪も降り、また気温も零下7°～8℃まで下がり、水道管の凍結に悩まされた。家族からは「もうお父さん東京へ帰ろうよ!!」とよく言われた。特に不満の頂点は、昭和52年6月に起こった宮城沖地震の時である。地震の恐怖で顔は引きつり、「東北は人の住む所ではない。地の果てである。」と散々に愚痴られた。ここで私は、地質屋の端くれとして知識のありったけを酷使して説得にあたった。「日本は火の国である。地震はどこで起こっても不思議ではない。むしろ被害を少なくするには、住んでいる所の地盤が問題となる。」と最もらしい説明をし、早速海の方から山の方へ引っ越しをし、家族の精神的安定を計った。これを期に東北の人々の情の暖かさ・自然の豊かさ・食物の美味しさ等の機微を知り、これ以降家族共々15年間「東北人」の成り切った。最も私自身は、家族の移動後およそ4年の間単身赴任を余儀無くされ、「東北人」の合計は20年近くにおよんだ。

この間、東北地質調査業協会の皆様には、

公私共に大変お世話になり、私の人間形成に大いに役立った。協会の行事では、技術委員会、研修委員会に参加し、少しでも若い人達の育成に努めてきたつもりである。講習会、若手セミナー等を通じ委員の方々、また若手技術者の人達と盃を交わしながら、ざっくばらんに語らった。楽しい思い出である。この若手技術者との懇親交流会は、短期間で成果が表れるものではなく、地道な活動により徐々に実が結ばれるものと思う。本来9月に開催された「全地連技術フォーラム'96仙台」が成功裡に終了できたのは、協会の皆様の御努力のお蔭と共に、私は若手セミナーのディスカッション、懇親交流会での語らいも一助を担っているものと密かに自負している。

東北20年間の内には、楽しい思い出ばかりではない。最も哀しい出来事は、平成6年5月に突然倒れられた天間則光大人の訃報である。氏は長年地質協会および地盤工学会の技術委員会の中心的メンバーで活躍され、種々行事の企画・運営に抜群の指導力を発揮された。氏との懇談は常に笑顔があり、論理的で説得力があった。今後、当業界の指導者として活躍が期待される中で、の逝去である。年令も近い事もあり、誠に残念でならない。今でも天間大人の笑顔が忘れられない。

最後に、東北地質調査業協会の増々の御発展を祈りつつ、思い出深い第2の故郷を去らしていただきます。